

蠅

橫
光
利
一



真夏の宿場は空虚であつた。ただ眼の大きな一疋の蠅だけは、薄暗い厩うまやの隅すみの蜘蛛くもの巣にひつかかると、後肢あとあしで網を跳ねつつ暫しばらくぶらぶらと揺れていた。と、豆のようにぼたりと落ちた。そうして、馬糞ばふんの重みに斜めに突き立っている藁わらの端から、裸体にされた馬の背中まで這はい上あがつた。

馬は一条ひとすじの枯草を奥歯にひつ掛けたまま、猫背ねこぜの老いた馭者ぎよしゃの姿を捜している。

馭者しゆくばは宿場の横の饅頭屋まんじゅうやの店頭みせさきで、将棋しょうぎを三番さして負け通

した。

「何なに？ 文句をいうな。もう一番じゃ。」

すると、廂ひさしを脱ははずれた日の光は、彼の腰から、円まるい荷物もののよう
な猫背の上へ乗りかかつて来た。

三

宿場の空虚ぼにわな場庭へ一人の農婦が馳かけつけた。彼女はこの朝
早く、街に務つとめている息子から危篤きとくの電報を受けとった。それ
から露しめに湿しめった三里やまみちの山路を馳かけ続けた。

「馬車はまだかのう？」

彼女は馭者部屋を覗のぞいて呼んだが返事がない。

「馬車はまだかのう？」

歪ゆがんだ畳の上には湯飲みが一つ転っていて、中から酒色の番茶ばんちやがひとり静しずかに流れていた。農婦はうろうろと場庭を廻ると、饅頭屋の横からまた呼んだ。

「馬車はまだかの？」

「先刻出ましたぞ。」

答えたのはその家の主婦である。

「出たかのう。馬車はもう出ましたかのう。いつ出ましたな。もうちと早はよ来ると良かったのじゃが、もう出ぬじゃるか？」

農婦は性急な泣き声でそういう中うちに、早や泣き出した。が、涙も拭ふかず、往還おうかんの中央に突き立っていてから、街の方へすたすたと歩き始めた。

「二番が出るぞ。」

猫背の馭者は将棋盤を見詰めたまま農婦にいった。農婦は歩

みを停めると、くるりと向き返つてその淡い眉毛まゆげを吊り上げた。
「出るかの。直ぐ出るかの。悴せがれが死にかけておるのじゃが、間に合わせておくれかの？」

「桂馬けいまと来たな。」

「まアまア嬉しや。街までどれほどかかるじやろ。いつ出しておくれるのう。」

「二番が出るわい。」と馭者はぼんと歩ふを打った。

「出ますかな、街までは三時間もかかりますかな。三時間はたつぷりかかりますやろ。悴が死にかけていますのじゃ、間に合せておくれかのう？」

野末の陽炎かげろうの中から、種蓮華たねれんげを叩く音が聞えて来る。若者と娘は宿場の方へ急いで行つた。娘は若者の肩の荷物へ手をかけた。

「持とう。」

「何アに。」

「重たかろうが。」

若者は黙つていかにも軽そうな容子ようすを見せた。が、額ひたいから流れる汗は塩辛しおからかつた。

「馬車はもう出たかしら。」と娘は呟つぶやいた。

若者は荷物の下から、眼を細めて太陽を眺めると、

「ちよつと暑うなつたな、まだじやろう。」

二人は黙つてしまつた。牛の鳴き声がした。

「知れたらどうしよう。」と娘はいうとちよつと泣きそうな顔を

した。

種蓮華を叩く音だけが、幽かすかに足音のように追つて来る。娘は後を向いて見て、それから若者の肩の荷物にまた手をかけた。

「私が持とう。もう肩が直なおったえ。」

若者はやはり黙つてどしどしと歩き続けた。が、突然、「知れたらまた逃げるだけじゃ。」と呟いた。

五

宿場の場庭へ、母親に手を曳ひかれた男の子が指を銜くわえて這はい入つて来た。

「お母ア、馬々。」

「ああ、馬々。」男の子は母親から手を振り切ると、厩の方へ馳

けて来た。そうして二間けんほど離れた場庭の中から馬を見ながら、「こりやッ、こりやッ。」と叫んで片足で地を打った。

馬は首を擡もたげて耳を立てた。男の子は馬の真似をして首を上げたが、耳が動かなかつた。で、ただやたらに馬の前で顔を擡しかめると、再び、「こりやッ、こりやッ。」と叫んで地を打った。

馬は槽おけの手蔓てづるに口をひっ掛けながら、またその中へ顔を隠して馬草まぐさを食った。

「お母ア、馬々。」

「ああ、馬々。」

六

「おっと、待てよ。これは悴の下駄を買うのを忘れたぞ。あ奴いっ

は西瓜すいかが好きじゃ。西瓜を買うと、俺おれもあ奴も好きじゃで両得じゃ。」

田舎紳士いなかしんしは宿場へ着いた。彼は四十三になる。四十三年貧困と戦い続けた効かいあつて、昨夜漸よつやく春蚕はるごの仲買なかがいで八百円を手に入れた。今彼の胸は未来の画策のために詰かまっている。けれども、昨夜銭湯せんとうへ行つたとき、八百円の札束かばんを鞆かばんに入れて、洗い場まで持つて這入こつて笑われた記憶しよきについては忘れていた。

農婦は場庭しやうぎの床几しよぎから立ち上ると、彼の傍そばへよつて来た。

「馬車はいつ出るのでござんしょうな。悴せが死にかかつていますので、早はよ街へ行かんと死に目に逢あえまい思いましたな。」

「そりゃいかん。」

「もう出るのでござんしょうな、もう出るつて、さつきいわしやつたがの。」

「さアて、何しておるやらな。」

若者と娘は場庭の中へ入つてきた。農婦はまた二人の傍へ近寄つた。

「馬車に乗りなざるのかな。馬車は出ませんぞな。」

「出ませんか？」と若者は訊き返かえした。

「出ませんか？」と娘はいつた。

「もう二時間も待つていますのやが、出ませんぞな。街まで三時間かかりますやろ。もう何時になつていますかな。街へ着くと正午ひるになりますやろか。」

「そりや正午や。」と田舎紳士は横からいつた。農婦はくるりと彼の方をまた向いて、

「正午になりますかいな。それまでにや死にますやろな。正午になりますかいな。」

という中にまた泣き出した。が、直ぐ饅頭屋の店頭へ馳けて行つた。

「まだかのう。馬車はまだなかなか出ぬじやろか？」

猫背の馭者は将棋盤を枕にして仰向きになつたまま、簀の子を洗つている饅頭屋の主婦の方へ頭を向けた。

「饅頭はまだ蒸さらんかいのう？」

七

馬車は何時になつたら出るのであろう。宿場に集つた人々の汗は乾いた。しかし、馬車は何時になつたら出るのであろう。これは誰も知らない。だが、もし知り得ることの出来るものがあつたとすれば、それは饅頭屋の竈の中で、漸く脹れ始めた饅

頭であつた。何なぜかといえは、この宿場の猫背の馭者は、まだその日、誰も手をつけない蒸し立ての饅頭に初しよて手をつけるといふことが、それほどけつべきの潔癖から長い年月の間、独身で暮さねばならなかつたという彼のその日その日の、最高の慰めとなつていたのであつたから。

八

宿場の柱時計が十時を打つた。饅頭屋の竈は湯気を立てて鳴り出した。

ザク、ザク、ザク。猫背の馭者は馬草を切つた。馬は猫背の横で、水を充分飲み溜めた。ザク、ザク、ザク、ザク。

馬は馬車の車体に結ばれた。農婦は真先に車体の中へ乗り込むと街の方を見続けた。

「乗つとくれやア。」と猫背はいった。

五人の乗客は、傾く踏み段に気をつけて農婦の傍へ乗り始めた。

猫背の馭者は、饅頭屋の簀の子の上で、綿のように脹らんでいる饅頭を腹掛けの中へ押し込むと馭者台の上にその背を曲げた。喇叭らっぴほが鳴った。鞭むちが鳴った。

眼の大きなかの一疋の蠅は馬の腰の余肉あまじしの匂いの中から飛び立った。そうして、車体の屋根の上にとまり直ると、今さきに、漸く蜘蛛の網からその生命いのちをとり戻した身体を休めて、馬車と

一緒に揺れていった。

馬車は炎天の下を走り通した。そうして並木をぬけ、長く続いた小豆畑あずきばたけの横を通り、亜麻畑あまばたけと桑畑の間を揺れつつ森の中へ割り込むと、緑色の森は、漸く溜った馬の額の汗に映って逆さまに揺らめいた。

十

馬車の中では、田舎紳士の饒舌じょうぜつが、早くも人々を五年以来の知己ちぎにした。しかし、男の子はひとり車体の柱を握って、その生々した眼で野の中を見続けた。

「お母ア、梨々。」

「ああ、梨々。」

馭者台では鞭が動き停つた。農婦は田舎紳士の帯の鎖に眼をつけた。

「もう幾時ですかいな。十二時は過ぎましたかいな。街へ着くと正午過ぎになりますやろな。」

馭者台では喇叭が鳴らなくなつた。そうして、腹掛けの饅頭を、今やこしこしと胃の腑の中へ落し込んでしまつた馭者は、一層猫背を張らせて居眠り出した。その居眠りは、馬車の上から、かの眼の大きな蠅が押し黙つた数段の梨畑を眺め、真夏の太陽の光りを受けて真赤まっかに榮はえた赤土の断崖を仰ぎ、突然に現れた激流を見下して、そうして、馬車が高い崖路がけみちの高低でかたかたときしきみ出す音を聞いてもまだ続いた。しかし、乗客の中で、その馭者の居眠りを知つていた者は、僅わずかにただ蠅一足であるらしかつた。蠅は車体の屋根の上から、馭者の垂れ下つた半白の

頭に飛び移り、それから、濡れた馬の背中に留^{とま}つて汗を舐^なめた。馬車は崖の頂上へさしかかった。馬は前方に現れた眼^め匿^{かく}しの中の路に従つて柔順に曲り始めた。しかし、そのとき、彼は自分の胴と、車体の幅とを考^はえることは出来なかつた。一つの車輪が路から外^{はず}れた。突然、馬は車体に引かれて突き立つた。瞬間、蠅は飛び上つた。と、車体と一緒に崖の下へ墜^つ落^{らく}して行く放^{ほう}埒^{らつ}な馬の腹が眼についた。そうして、人馬の悲鳴が高く一声発せられると、河原の上では、圧^おし重^{かさ}なつた人と馬と板片との塊^{かた}りが、沈黙したまま動かなかつた。が、眼の大きな蠅は、今や完全に休まつたその羽根に力を籠^こめて、ただひとり、悠^{ゆう}々^{ゆう}と青空の中を飛んでいった。

底本：「日輪・春は馬車に乗って 他八篇」岩波文庫、岩波書店
1981（昭和 56）年 8 月 17 日第 1 刷発行
1997（平成 9）年 5 月 15 日第 23 刷発行

入力：大野晋

校正：瀬戸さえ子

1999 年 7 月 9 日公開

2003 年 10 月 20 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。